

被災橋梁でモニュメントを

モニュメントの案について話し合う参加者ら
＝八代市



2020年7月の豪雨で被災したJR肥薩線の「球磨川第一橋梁」の部材を、教訓を伝えるモニュメントとして生かそうと沿線住民の検討が始まっている。八代市坂本町で、熊本高専八代キャンパスの学生と地元住民のワークショップがあり、活用策を話し合った。

熊本
豪雨
2年

同橋梁は、同市坂本町の鎌瀬駅―瀬戸石駅間の鉄橋で長さ205㍎。球磨川の増水で流失した。住民でつくる坂本住民自治協議会がJR九州から無償で譲り受け、橋名が残るアーチや枕木などを保管している。

モニュメント化の検討は、肥薩線の存続を願う沿線住民グループ「肥薩線again（アゲ

イン）」が、同校に依頼して本格化。同校専攻科の1、2年生らが、4月から部材のデータ測定や模型作りに取り組んできた。

ワークショップは18日、坂本地区福祉センターであり、住民や生徒ら約20人が4班に分かれて議論。模型を使ってモニュメントのイメージを広げた。

水害の恐ろしさや橋の大きさ、質感を伝えたいとした班は、枕木を使ったベンチや球磨川を見下ろす櫓を考案。住民に橋が身近なものだったことを伝えたいとした班は、部材を組み合わせた屋根付きのバス停を提案した。地中に遺構として残す案や解体してポストにする案も出た。

同科2年の中村絢夏さん(21)は「実際に町で暮らす住民の悩みや意見を聞きながら考えることができ、とても勉強になった」。肥薩線アゲインの小澤光二代表(58)は「いろいろなアイデアが出て新鮮だった。どのような案がまとまるのか楽しみ」と話した。
(緒方李咲)



坂本住民自治協議会がJRから無償で譲り受けた球磨川第一橋梁の一部

八代市坂本町
熊本高専生
活用策を提案